平安文学に見られる「高麗（こま）」

金（キム）　裕千（ユウチョン）（祥明大學校副教授）

国風文化が開花した平安時代の文学作品には、その時代性を反映してか、古代韓国との関係が語られることはあまりないようである。そんな中、いくつかの作品に散見する「高麗」「高麗人」「高麗楽」「高麗の紙」「高麗の錦」など、古代韓国に関連する一連の語が注目される。

まず、この「高麗」とは、高句麗（紀元前37～668年）、渤海（698～926年）、高麗（918～1392年）の三国に対する名称であることが注意される。平安時代（794～1192年）と時代が重なるのは渤海と高麗であるが、平安時代の文学作品において語られる「高麗」の語は、高句麗（あるいは百済・新羅を含めた韓半島）と渤海を指す場合が多い。

平安文学における「高麗」の用例を概観すると、和歌では『古今集』以下、八代集には全く見られない。物語では、『うつほ物語』に18例、『源氏物語』に20例、『狭衣物語』に３例、『堤中納言物語』に１例が見られる。他に『枕草子』に４例が見られるが、『土佐日記』をはじめとする日記作品には用例がない。また、「高麗」という表現は、概して異国・異国人としての「高麗」「高麗人」、舞楽関連の「高麗楽」「高麗笛」、「高麗錦」「高麗の紙」「高麗端」などの文物関連において用いられている。以下、『うつほ物語』と『源氏物語』を中心に、これらが作品世界においてどのようにイメージされ、また機能しているのかについて考えてみたい。

「高麗楽」とは、高句麗より伝来した楽舞で、天武天皇12年（683）正月、百済楽・新羅楽とともに初めて奏された。平安中期、楽制が定められる時に、これら韓半島伝来の楽舞に日本の新作も加わって統合され、中国伝来の唐楽を左方の楽、高麗楽を右方の楽と呼ぶこととなった。

『うつほ物語』には「高麗楽」が３例見える。たとえば、「祭の使」には、桂殿で夏神楽を催す右大将藤原兼雅が左大将源正頼を迎る時、右方の「高麗の楽」を演奏させたとある。他の用例などを考え合わせると、『うつほ物語』の「高麗楽」は宴席や催し、祝福の場で、相手に礼を尽くしたり、感謝の意を表したり、あるいは喜びの表現として奏され、そのいずれもが左方の唐楽、右方の高麗楽という発想が明確であるといえる。

『源氏物語』にも「高麗楽」の用例が３例見られる。紅葉賀巻では、朱雀院の賀を祝って、池には竜頭と鷁首の船が漕ぎ巡り、それぞれ唐楽と高麗楽が奏されるといった盛大な賀宴の様子が語られ、そこで披露される源氏の青海波の舞いの美しさが印象づけられている。「唐土、高麗の楽」の語が華麗絢爛な公的な儀礼の場を指す表現として提示され、それが源氏の理想性を保証するごとく機能しているのである。また、若菜上巻、夕霧主催の源氏四十の賀宴の場面でも、高麗楽が奏されることによって冷泉帝の後援する祝賀の儀礼性が印象づけられ、祝われる側の源氏の位相がいっそう高められている。このように「高麗楽」は特に「唐楽」と並記されることで、物語の場の儀礼性を表象するのであるが、その場にはいずれも源氏がいる。『源氏物語』の「高麗楽」は、源氏を照らし出す場面を演出する、源氏に関連の深い表現なのである。

「高麗笛」は、長さが約36センチと横笛より短く、孔も横笛の七つに対して六つのもので、高麗楽に用いられる笛である。『うつほ物語』の４例のうち３例が嵯峨の院に関するもので、高麗笛の名手である嵯峨の院に、俊蔭が唐（波斯国）の帝から受け取った高麗笛が贈られることが語られている。これは嵯峨の院に対する俊蔭の恨みが浄化され、俊蔭一族の栄華が語り収められるといった、作品の主題を象徴しているとされる。『源氏物語』には「高麗笛」が４例見られる。「高麗笛」で注意されるのは、『うつほ物語』もそうであるが、それを吹く人物が左大臣や源氏といった最高の貴人であるということである。一方、「高麗笛」は、最高の贈物としてのイメージを有する。梅枝巻では、源氏から蛍兵部卿宮へ、若菜上巻では、夕霧から太政大臣へ高麗笛が贈られている。『源氏物語』における「高麗笛」は、それが貴人の楽器であることとも関わって、合奏や贈与を通して人物間の関係の緊密さを表すものとして語られている。

古く『万葉集』にも詠まれている「高麗の錦」は、『うつほ物語』に２例、『源氏物語』に３例の用例が見られる。たとえば、絵合巻、冷泉帝の前での絵合の場面で、左の源氏方の「唐の錦」に対して、右の権中納言方の「高麗の錦」が対比されて語られるなど、いずれも舶来の最高の品というイメージがある。ところで、特に、『源氏物語』においては、この「高麗」をどの国とするかという点が、多少問題であると思われる。というのは、『源氏物語』は11世紀の初めに書かれたが、物語の時代が醍醐天皇の延喜（901～922年）の頃と設定されていて、この「高麗」を668年に滅亡した高句麗、698年から926年まで続いた渤海、918年に成立し1392年に滅んだ高麗の三国のど

れかに限定するのがなかなか難しいからである。古く日本に伝来した高句麗産、渤海を通して入ってきた高句麗産、渤海産、あるいは10世紀に建国された高麗のものなど、さまざまな想定が可能で、なお検討が要されるが、韓半島舶来の最高級品のイメージとしてとらえておきたい。

一方、「高麗の紙」は、『うつほ物語』には見られず、『源氏物語』に３例見られるのみである。「高麗の紙」もまた、「高麗の錦」と同様の理由で、国の特定が難しい。韓半島からの舶来の紙であるとした上で、そのイメージを見てみると、明石巻で源氏が明石の君への恋文に用いたのが「高麗の胡桃色の紙」で、懸想文にふさわしい、洗練されたイメージがある。また、梅枝巻では、明石の姫君の入内のための草子に用いられ、気品高く美しい、最高の紙であることが語られている。

「高麗」「高麗人」の用例は、『うつほ物語』にそれぞれ５例と２例、『源氏物語』に４例と１例が見られる。『源氏物語』桐壺巻には、来日した「高麗人」の中に優れた観相家がいて、七歳になる源氏の不思議な運命を予言するという記述が見える。この「高麗人」は、鴻臚館に滞在しながら、「いと才かしこき博士」である弁や源氏とすぐれた漢詩を作り交すなど、卓越した学才の持ち主であることが印象づけられている。先に触れたように、『源氏物語』が書かれた同時代に韓半島を統治していたのは高麗であるが、『源氏物語』は物語の時代を醍醐天皇の頃として設定しており、この「高麗人」は渤海国からの国使である。

渤海は、668年に高句麗が新羅・唐の連合軍によって滅ぼされてから約30年後、698年に高句麗の武将ある大祚栄が高句麗の遺民と靺鞨族を率いて中国東北部から韓半島北部にかけて築いた国である。領土を広げ、唐や日本と積極的に通交し栄えたが、926年契丹によって滅ぼされた。日本への渤海使の派遣は、727年の初派遣以来、919年まで34回行われ、日本側の使節は811年までに15回派遣されている（金鐘徳「高麗人の予言と虚構の方法」『源氏物語の始発ー桐壺巻論集』竹林舎、2006年参照）。

渤海使は大使をはじめ学識や漢詩文に優れ、日本側の接待官を務めた文人たちとの間に詩文の贈答が盛んに行われた。それらは『文華秀麗集』『経国集』『菅家文草』などの漢詩文集に収められている（田中隆昭「渤海使と日本古代文学ー『宇津保物語』と『源氏物語』を中心にー」『別冊アジア遊学 No. ２渤海使と日本古代文学』勉誠出版、2003年参照）。桐壺巻の記述に見える「高麗人」には、このように漢詩文の文学世界において形象された渤海使像や彼らと日本の文人との交流が投影されていると見られる。

このような渤海使としての「高麗人」のイメージは、『うつほ物語』においてより顕著である。たとえば、「俊蔭」では俊蔭のすぐれた学才を示す逸話として、読書始めの七歳の時「高麗人」と漢詩を作り交したことが語られている。そして、『うつほ物語』の渤海使に関する記述が『源氏物語』に比べ特徴的なのは、その描写がより実在感があるという点である。たとえば、「蔵開上」で朱雀帝は仲忠に対して、渤海国の使節を応対するにはそれだけ優れた学識や文才が要されると言っている。

さて、『うつほ物語』において形象された渤海使のイメージを、確かに『源氏物語』も引き継いでいるが、『うつほ物語』と決定的に異なるのは、観相や予言という要素である。「高麗の相人」には、韓半島と関連する観相説話のモチーフが指摘されている（金鐘徳・田中隆昭、前掲論文）。『聖徳太子伝暦』敏達天皇 12 年（583）7 月の条で、百済の賢者、日羅が太子の観相を見る記述や、『日本三代実録』巻第五十四仁明天皇嘉祥 2 年（849）の条で、渤海国の大使王文矩が時康親王（光孝天皇）の観相を見てその即位を予言している記述が見える。

渤海は、『源氏物語』内に設けられた虚構の時代には存在するが、もやは実際の時代には存在しない。そのような『源氏物語』における渤海の実在感の希薄さや異国性が、現実にはあり難い主人公の超人性を保証する観相や予言の方法を手繰り寄せていると思われる。桐壺巻の「高麗人」には、菅原道真ら日本の文人たちと交流を深めた史実や漢詩文の世界での渤海使の姿と、王位継承に関して観相を行なったという伝承世界での渤海使のイメージが緊張感をもって共存している。

以上のように、平安文学に語られるこれら「高麗楽」、高麗の文物、「高麗人」などは、その時代性をはじめ、儀礼性や舶来性、あるいは学才の卓越性や異国性など、その位相はそれぞれに異なっている。しかし、それらの固有のイメージは相互に共鳴しながら、平安文学において「高麗」の多義的なイメージを形成している。